

山本孝二町長に義援金を手渡す御船中学校生徒会



勇気と元気と復興を願って

御船小・御船中が義援金届ける

御船小学校(佐藤公一郎校長、323人)と御船中学校(加藤敬之校長、498人)は3月28日、役場を訪れ、東日本大地震で被災された人を支援するために義援金を届けました。これは両校で、児童生徒たちが自主的に義援金を呼びかけて、集められたものです。代表で訪れた児童生徒たちは、「被災者の方の勇気になれたらうれしい」「東北地方の皆さんが元気になれたらうれしい」「一日も早く復興してもらいたい」と思いを話していました。義援金は、町から日本赤十字社などを通じて、被災地へと届けられます。

真心も詰めたお弁当を配達

高齢者に手作り弁当配達

御船町民生委員児童委員(片岡浩喜会長、45人)は3月8日、町内の高齢者宅に手作り弁当を届けました。これは、75歳以上の一人暮らしを対象に、友愛訪問を兼ねた取り組みで、20年以上続けられています。材料費は、町社会福祉協議会からの補助金を活用。女性委員で構成する男女共同参画部会が、約4時間かけて、山菜おこわ弁当約400食を調理後、男性委員と一緒にできたての弁当を配達しました。同部会では、「一人暮らしの元気な笑顔を見ると安心します。できる限り、続けていければ」と話していました。



担当の民生委員から出来たての弁当を受けとる馴松律子さん(右)

善意のカタチを義援金に

東日本大震災被災者応援チャリティー

東日本大地震の被災者を応援するためのチャリティーイベントは3月27日、城山公園で行われました。同イベントは、これまで城山公園整備を目的として、みふね両岸会(藤木正幸会長)主催で開催。今回は、全国各地でイベントが自粛される中、同会では「私たちにできること」をテーマに、企画を変更して実施に踏み切りました。町観光協会、町商工会を中心に町内企業などから協賛品を募ったオークションや、御船高校生の似顔絵と書のチャリティーコーナーが設けられ、来場者に募金を呼びかけました。藤木正幸会長は、「自分たちに今、できることを行動に移して、被災された多くの方のために役立ててもらえればうれしい」とコメント。今回、チャリティーイベントの収益はすべて義援金として東北地方に贈られます。



協賛品をオークションにかけるみふね両岸会

地域住民をつなぐ拠点整備

古閑迫でバス待合所が落成

地域の交流空間を兼ね備えた「バス待合所」の落成式は3月20日、上野地区古閑迫で行われ、地域住民などが完成を祝いました。バス待合所の土地約100平方メートルは、地主から区へ無償提供されたもの。区では、バスを利用する高齢者が多い現状をとらえ、座って雨風をしのげる待合所を整備しようと建設に着手しました。作業は、空き家解体から土地整備、バス停建設までを約8カ月間かけて、地域住民が総出で整備。待合所は、木造づくり約6平方メートルで、両端には凱旋門をイメージした約4メートルの一本杉を据えたほか、ベンチには解体した家屋の梁を再利用した造りが特徴です。森川邦昭区長は、「憩いの場として多くの人に利用してもらい、地域で管理していきたい」とコメント。区では、環境美化委員の組織を立ち上げ、管理していく予定です。



上野地区の県道221号田代御船線沿いに完成したバス待合所

能寛や八勢眼鏡橋について講話をする奥田盛人さん(左)



偉大な先哲の遺徳をしのぶ

林田能寛祭

林田能寛祭は4月4日、上野地区の八勢眼鏡橋で開かれ、地域住民など約30人が参加しました。能寛は、私財を投じて、1855(安政2)年3月に八勢眼鏡橋を完成させた郷土の先哲。その偉業を後世に語り継ぐことを目的に、林田能寛顕彰会(福味総一郎会長)が主催し、今年で25回目。神事では、明尊寺の嶋村弘道住職が読経をあげ、地元代表の牛嶋清一区長などが焼香をすませ、能寛の遺徳をしのびました。神事後、町郷土史家の奥田盛人さん(七海)の講話があり、参加者は熱心に耳を傾けていました。

高原一帯に広がった火の帯

吉無田高原で野焼き

行楽地として知られる吉無田高原で3月12日、野焼きが緑の村付近の草原一帯で行われました。野焼きは、害虫駆除や草の芽立ちを助け、山林火災の防止などを目的とした、春の伝統行事です。地域住民や地元消防団など約50人が参加して、高原山頂付近から順に火入れを開始。火は枯れ草に燃え移り、パチパチと音をたてながら勢いよく燃え広がり、一面は火の帯に包まれました。約20分の草原は、2時間ほどで真っ黒に様変わりして、これから訪れる本格的な観光シーズンに備えました。



火消棒を手に野焼きを見守る地域住民たち